

北海道政策研究会

道内調査 in 十勝 調査報告書

2011年8月9日-11日



十勝が丘展望台から十勝平野を望む（音更町）

日下 太 朗（団長）

佐々木 恵美子（事務局長）

北 口 雄 幸

田 村 龍 治（副団長）

稲 村 久 男

沖 田 清 志

北海道政策研究会

視察のしおり

日程表 第1日目 8月9日(火)

行き先等	時間	日 程 等
帯広着	11:30	帯広駅集合。到着後、「はげ天」にて昼食
本別町	14:00 ~ 15:30	北海道立農業大学校（鞍懸周校長対応）
ケアセンター	16:00 ~ 17:05	本別町の医療と福祉の取り組みを視察
本別グランドホテル	18:00 ~ 20:00	高橋正夫本別町長と意見交換及び懇談 本別グランドホテル宿泊

日程表 第2日目 8月10日(水)

行き先等	時間	日 程 等
ホテル発	8:15	本別グランドホテル発
士幌町	8:45 ~ 9:15	士幌町の保健・医療・福祉を視察（小林康雄町長対応）
十勝工場	9:30 ~ 10:30	士幌町、ホクレンくみあい十勝飼料「十勝工場」を視察（蔵光和之工場長対応）
鹿追町	11:30 ~ 12:30	鹿追町環境保全センターを視察（鹿追町安部克裕副町長対応）
昼食	13:00	高齢者がお店を切り盛りする「おふくろさん」にて昼食
音更町	15:00 ~ 16:00	音更町立下士幌小学校を視察（象設計集団町山一郎代表対応）
意見交換会	18:00 ~ 20:00	帯広商工会議所の役員など、地元経済界との意見交換会 ホテルパコ宿泊

日程表 第3日目 8月11日(木)

行き先等	時 間	日 程 等
ホテルパコ発	8:30	ホテル発
	9:00 ~ 10:00	音更町「十勝 夢 mill」工場を視察(山本英明社長対応)
新得町	11:00 ~ 12:00	新得町「共働学舎新得農場」を視察(宮嶋望代表対応)
昼食	12:15	「みなとや」で昼食、解散。

【調査結果報告書】

1日目 8月9日(火)

北海道立農業大学校

北海道立農業大学校は、次代の農業及び農村を担う優れた農業後継者の養成を目的として、1946年(昭和21年)北海道庁立農業講習所として発足。1974年(昭和49年)に農業後継者育成の高等教育施設として現在の北海道立農業大学校に改組した。

具体的教育内容は、養成課程として畜産経営学科及び畑作園芸経営学科で60名を養成し、研究過程として農業経営研究科(10名) 研修部門として稲作経営専攻コース(10名で深川市の拓殖大



学北海道短期大学に委託)を養成している。また、短期間の研修として、一般研修及び農業機械研修などを行っており、年間1,000名を超える皆さんが受講している。

この大学校の特徴としては、プロジェクトを主体とした実践的な学習を進め、先進農家や企業等で体験学習を重ね、在学中に多くの資格や免許を取得し、全寮制による自主・自立と協同精神を養成している。

大学校運営の悩みとしては、年々予算が削減されていることなどが話され、必要な予算の確保や農業が基幹産業の北海道として、このような大学校がもっと必要と感じたところだ。

本別町の医療と福祉

本別町は、“ものわすれ散歩のできるまち”をめざし、高齢者が認知症になっても安心して暮らせるまちづくりを進めている。その原点は、地域住民である自治会や民生委員が地域で高齢者や障がい者を支え合うネットワークを構築し、在宅福祉ネットワーク事業を支えている。この事業は、「ひとりの不幸も見逃さない」をスローガンに、29ものネットワークが組織化されており、これはまさしくクモの巣の組織である。



また、介護相談員が施設や在宅訪問を通じて、サービスに関する不満や要望を聞き、事業所にその内容を橋渡しすることでサービスの質の向上が図られている。しかし、介護相談員の資格を得る研修が北海道では開催されておらず、資格を取得しようとする方は、時間とお金をかけて本州まで出かけている実態をお聞きし、北海道がしっかり支援する必要があると感じた。

今日の具体的現地視察は、本別町総合ケアセンター及び介護老人保健施設アメニティ本別、本別町国民健康保険病院、小規模多機能型居宅介護事業所「清流の里」などを視察させていただいた。

2日目 8月10日(水)

士幌町の保健・医療・福祉

士幌町は、昭和40年代から「愛のまちづくり」を進め、「保健・医療・福祉が一体となったシステムで、誰もが安心して暮らせるふれあいユートピアをつくらう」をスローガンに、福祉村構想を進めている。

具体的には、住宅街の一角を「福祉村」と定め、総合福祉センターを核に、60



床の国保病院、117床の特別養護老人ホーム、ケアハウスとディサービスを行う士幌愛風会、士幌町認定こども園などを配置し、地域住民の医療と福祉を守っている。

また士幌町の福祉の中核を担う社会福祉協議会は、ふれあい・いきいきサロン事業(17地域)や安心・安全の地域づくり事業(緊急医療情報キットの設置)、見守りネットワーク事業などを行っている。

ホクレンくみあい十勝飼料「十勝工場」

ホクレンくみあい十勝飼料「十勝工場」は、飼料価格高騰に伴い、製造工程の合理化や製品コスト削減を目的に、2011年（平成23年）6月十勝管内士幌町に「十勝工場」を建設した。十勝工場は、原材料を釧路西港から大型トラックで陸送し、この工場加工製造して十勝管内の酪農畜産農家に提供している。

十勝管内24農協のうち、8農協に供給し、その割合は管内の3分の2に相当する。また、この工場から20キロ内では、90%を超えるエリアをカバーし、運送コストの低減を果たしている。□定時月産8,000トンを誇るこの工場は、わずか4～5人のスタッフで操業しており、くみあい飼料のコスト低減に大きく貢献している。

また、十勝工場の特徴は、1)安全・安心対策、2)商品性の向上対策、3)省エネ・省力化等の対策、を徹底しており、ISO9001品質マネジメントを活用し、GMP（適正製造基準）管理方式とHACCP手法による製造・品質管理を実践している。

このような工場により、本道の畜産・酪農を支えていただいていると感じたところだ



鹿追町の環境保全センター

鹿追町は、農業と観光のまちづくりを進めており、住宅街に近い酪農家の糞尿対策に頭を悩めていたという。

そこで、家畜の糞尿と生ゴミ、浄化槽の汚泥などを活用した「バイオマスプラント」を2007年（平成19年）10月に建設した。11戸の酪農家で飼育している約1,300頭から出された糞尿を1～2日ごとに回収、発酵してガス化し、そのガスはガス発電機にて1日約4,000KWh/日を発電し、プラントで使用する2,900KWh/日を除く1,100KWh/日を北電に売電している。売電価格は、昼で1kWh当たりの9.5円、夜は4.5円で、平均で7.5円程度になるという。しかし、この価格では、更新費用などが出ないため、現在国会で審議している再生可能エネルギー特別措置法に期待しているという。

また、発酵処理され残った消化液は、地域の酪農家や耕種農家の畑に散布し、速効性の有機肥料として活用されている。

鹿追町では、今後、さらにこのような施設を増やす計画を持っているとお話しされ、北海道としてもこのような取り組みの拡大を検討すべきと感じたところだ。



音更町立下土幌小学校

音更町立下土幌小学校は、“環境と共生する小学校をめざす”とのコンセプトのもとに、2004年（平成16年）8月に完成した小学校だ。

この小学校を設計した株式会社象設計集団によると、十勝の気候を最大限活用した学校を設計したという。それは、北側教室の提案である。緯度が高い十勝



では、冬に太陽光が教室の奥まで差し込み、授業にはまぶしすぎる環境となっていた。そこで、普通教室を北側には位置し、オープンスペースを南側に配置するという大胆な提案をした。その結果、北からの柔らかな光を確保し蛍光灯を必要としない、自然光だけという省エネルギーも獲得した。

また、児童生徒の活動領域を1階に配置し、機能的で活気ある学校となった。

一方、理科や家庭科などの特別教室を2階に配置したが、使用頻度や機能性などを考えると、特別教室を持たず、普通教室を若干広げるだけで十分その機能が発揮でき、その結果、建設面積やコストの縮減が図ることができるという、反省点も聞くことができた。

今後、これらの貴重なご意見を参考に、学校づくりを進めていけたらと思っている。

3日目 8月11（木）

「十勝 夢 mill」

「農業の6次産業化」、「小麦の地産地消」、「フード・マイルージの低減」を目指し、十勝管内最大の生産能力を持つ小麦製粉工場を視察した。この工場は、“ヤマチュウ”の愛称で親しまれている「株式会社山本忠信商店（山本英明社長）」が、農林水産省の補助を受け、今年度から試験操業しているものである。

この工場建設のきっかけは、農家の皆さんが自分でつくった小麦が地域で商品化され、「美味しい」と言ってもらえ、誇りを持って農業を進めてほしいとの思いから着手したという。また、この工場の建設と同時に、“十勝小麦・小麦粉連合”を設立し、「生産者と消費者を結ぶカンパニーとして、小麦生産者とレストランや食品加工業者、消費者が直接情報交換をし、お互いを支え合う仕組みを作ろうとする取り組みであり、十勝発の新しい小麦流通モデルを育てていこうとするものです」とのお話をいただいた。

今後の取り組みとしては、「管内にパスタ工場も建設し、2次・3次加工をより進めていきたい」と、その夢は尽きない。山本社長の話に感動を受けながら、工場内を視察させてもらった。



共働学舎「新得農場」

共働学舎新得農場は、1978年(昭和53年)6月、引きこもりや不登校など、経済優先の社会からはじき出された人々が、搾乳をしながら「自労自活」の生活を始める。しかし、牛乳の出荷だけでの生活は厳しく、1984年(昭和59年)ブラウンスイス種を導入し、本格的なチーズづくりを始めた。現在では1億8千万円の農業収入のうちチーズでは1億2千万円を売り上げる主力商品となっている。



現在、牛120頭を飼育し、63人の構成員で10人の子供と暮らす大所帯となっている。毎日の作業については、朝食前にそれぞれの仕事を自ら決め、結局嫌な仕事は残り、宮嶋代表がする事になると笑いながら語ってくれたが、嫌な仕事でも代表がやっていると、誰かが手伝ってくれるという。まさに、ここに、共同社会の原点を見るような気がした。

宮嶋代表は、大規模酪農に走るのではなく、乳牛10頭でできる酪農を目指すべきと語った。乳牛1頭で年間6,000kgの牛乳を出し10頭で60,000kgとなる。それをただ出荷しても60,000kg×80円で480万円にしかならない。60,000kgの牛乳をチーズにすると、10分の1に減るが6,000kgのチーズができ、1kgあたり3,000円で販売すると、1,800万円の収入になるという。生乳での販売の3.75倍だ。放牧酪農にこだわりながらも、より付加価値を高める農業を目指し、より多くの人が入力できる産業にする。これが理想の酪農だと、宮嶋代表は熱く語ってくれたのが、印象的だった。